

地域おこしに 雨乞い祭りを復活



復活した「雨乞い祭り」の様子

名前
の由来は
水石山

地域おこしに生かそうと、平成25年に、県立自然公園で地区を象徴する「水石山」に伝わる雨乞い祭りを復活させました。

その祭りは、大昔、地区が日照りに悩まされたとき、村人が山頂の巨石のくぼみに水たまりを発見し、雨乞いをすると大雨が降ったため、それから毎年参拝すると水は枯れなかったという言い伝えによるもので、その巨石が「水石」と呼ばれるよ

うになり、山の名前の由来になったそうです。

住民が毎夏草刈りボランティアに取り組むその日、雨乞い祭りを執り行います。神主が祈祷し、参列する住民は地区の歴史に思いを馳せます。三和公民館の市民講座では水石山散策も楽しみ、市内各地の市民が水石山の自然や歴史を感じています。

地域の防災力向上

「安全功労者総務大臣表彰」
を受賞

関田総合自主防災会は平成元年2月に誕生し、防災講話や初期消火訓練などを定期的に開催するなど、地域の防災力向上に取り組んできました。その活動が認められ、平成30年度に「安全功労者総務大臣表彰」を受賞しました。熱心な取組みが伝わる例では、地区内にある耐震性貯水槽の給水訓練実施です。20年以上前から設置されていたにも関わらず、東日本大震災時にこの非常用貯水槽の存在を知らなかつた反省を生かして、平成29年度に初めて行われました。その翌年、市内で初めて、水道局から貯水槽の鍵を管理する許可を得ました。

平成29年10月の台風で「避難準備・



耐震性貯水槽の給水訓練をしている様子

高齢者等避難開始」が発令され、勿来第二中学校に避難所が開設された際には、会員が地区内の介護施設に駆け付け、利用者の避難誘導も行いました。

今後の目標として、馬上昌幸会長は「女性部会を発足したい」と話します。その理由は、災害時の一般的な役割として、炊き出しは女性、相談窓口は男性というイメージがありますが、その役割を逆にし、女性が相談窓口を務めれば、男性だけでなく女性避難者も遠慮なく悩みを打ち明けられるというメリットがあるからです。馬上会長は「まとめ役の女性が見つかったら実現させたい」と思いを語ってくれました。

つながる・交わる

事例
23

宮2区

内郷

交流の場 づくりの大切さ



さあ、内郷さんぽに出発！

ソッと見守る！
あんしん見守り隊の活躍

お年寄りの見守りなどを行う「あんしん見守り隊」の活動が、住民同士の交流を広げています。老人会と子ども会の解散により、一時は住民同士の交流が失われかけましたが、見守り隊活動の一環で多彩な催しが開催され、交流が盛んになってきたようです。

「あんしん見守り隊」は平成25年3月に結成されました。平成30年1月時点の隊員総数は40～80代の172名。「ソッと見守る！ チョット気にして！ ナガーグ気にして！」をキャッチフレーズに、重荷にならない活動を心掛けています。定期巡回は年2回で、普段は安否確認を意識して隣近所とあいさつをするのみ。異変に気付いたら、連絡員や隊長(区長)に連絡する体制になっています。近所のお年寄り宅に救急車が止まつたら、翌日訪問して声掛けすることも。また、新聞がドアに差し込んだままの家を見つけ、声掛けしても反応がなかった時には、隊長に連絡して安全を確認したケースもありました。

見守り活動は住民だけでなく、地区内の事業所も協力しています。電気店や郵便局など8事業所が、支援を要する住民を見つけたら隊に連絡する体制となっています。また、葬祭場は車に貼り付ける「見守り隊」マグネットを寄附してその活動をサポート、コンビニエンスストアは区のイベントの受付窓口を引き受けています。

見守り隊員間の連携が密なのは、交流機会の多さのため。見守り隊が結成された年、まとめ役が不在で老人会と子ども会が解散しました。

住民の集まる機会がなくなると懸念して始めたのが毎月1回の「いき

いきデイサロン」。さらに若い世代との交流も活発化させようと企画されたのはクリスマス会。子ども、保護者、お年寄りの3世代が集まり、毎年末に約40人が交流しています。「体操したい」という意見があり、市シルバーリハビリ体操も開始し、平成29年度の集会所の利用回数は70回にも上りました。

近くの障害者自立支援施設東洋学園や県復興公営住宅の住民とも活発に交流しています。区の文化祭では、東洋学園の利用者や復興住宅の住民から趣味の作品を募って展示了ほか、復興住宅のサロンへの訪問、そのお返しに区のカラオケ大会にご招待するなど、佐藤豊区長は積極的に交流を深めています。

平成30年の秋には、復興住宅の住民と交流するウォーカラリー「内郷さんぽ」をNPO法人と連携して企画しました。復興住宅から住民約20人と宮町2区の住民約50人ら関係者を合わせて115名が参加。白水阿弥陀堂などを巡った後は、集会所で落語鑑賞を行い、みんなで笑いました。

区長・会長の想い

地域コミュニティを活発にするには、まずはとにかく交流の場をつくります。砂絵、折り紙、花壇作り、カラオケ大会、ハロウィーンパーティーなど、色々なイベントを開催してきました。サロンにあまり参加しない男性向けに囲碁・将棋イベントを企画した結果、参加者がゼロだった失敗もありましたが、失敗を恐れずやってみることが大事。スタッフも参加者も楽しんでいれば、自然と人が集まっていきます。

佐藤 豊 区長

介護・医療を介した交流

地域で見守る介護福祉施設



福島県立医大生との交流イベントの様子

地区内の介護福祉施設から「交流できないか」と提案を受けたのを機に、連携を深めています。施設利用者と一緒に体操とお茶飲みを楽しむほか、施設の雰囲気を知るきっかけづくりにもなっています。災害時には避難を手伝い、防災訓練も連携して行っています。

さらには、福島県立医大生との交流イベントも開催しています。同大生が研修の一環で3年前に「関田サロン」を訪れた縁で、毎年住民のメディカルチェックが行われています。住民と学生間で良好な関係が築かれ、去年秋には「サロン」ではなく、教授の健康講話も盛り込んだ学生の健康診断イベントが企画されました。

地区イベントで交流人口を増やす

17回目の「滝富士登山」

地元の自然を生かして交流人口を増やす取組みを展開しています。頂上から太平洋の眺望が楽しめる滝富士(標高306メートル)の登山イベントを毎年5月に開催。滝富士は、山と溪谷社が出版した「ふるさと富士百名山」にも選ばれた美しい景観で、往復約1時間半で気軽にハイキングが楽しめます。「滝富士登山」は今年で17回目。住民有志が登山道を整備しています。

地区外からも参加者が訪れます。平成30年のイベントでは、園児から80代までの約80名が登山を楽しみました。下山後は、婦人部が豚汁を振る舞い、毎年好評だといいます。櫛田吉一区長は「地区外から毎年参加してくれる人もいて、地元住民と触れ合っています。交流人口を増やすためにも、この取り組みは続けていきたい」と思いを語ってくれました。



地区外からも参加者が集まる「滝富士登山」

事例
26

郷ヶ丘一丁目自治会

平

世代間交流で 一緒に遊ぶ



楽しい時間はあっという間に過ぎてしまいます

小学生が一緒に
お年寄りと
楽しむ時間

長寿会は長年、郷ヶ丘小学校の3、6年生との交流を続けています。6年生との交流は平成24年から。地区のお年寄りによるわら細工指導で始まりましたが、現在ではニュースポーツの輪投げ「クロリティー」と一緒に楽しんでいます。卒業が近づくと謝恩会にも招待されます。平成29年の謝恩会では、合唱や楽器の演奏などが披露され、寸劇では安土桃山時代と現代をタイムスリップする内容

に「クロリティー」を取り入れた独創的な展開となっており、児童から感謝の気持ちが届けられたようです。

3年生とは、平成22年から昔遊びを楽しんでいます。あやとり、おはじき、けん玉、メンコ、お手玉などの、面白さを教えます。児童からお礼の文集や、家庭科の授業で感謝を込めて仕立てられたフキンなどが贈られた年もありました。

事例
27

豊間区

平

新旧住民の 交流を図る



「大しめ縄づくり」を体験する子どもたち

震災後のあらたな
コミュニティづくり

東日本大震災で大きな津波被害を受け、新たなコミュニティづくりが課題になっています。特に若い世代が転出する一方、移住者も徐々に増加。新旧住民の交流の場づくりを展開しています。

平成30年7月には、区画整理や道路工事が完了し、ハード面の復興は落ち着きました。新しい住民や若い世代も含めた交流づくりに力を入れる段階に入り、区は「まちづくり会」を組織。「まちづくり会」では昔遊びや地域の伝統を子どもに伝える「とーちゃんの会」、郷土料理を伝えて女性が交流する「いちごの会」、植樹や花植えする「花と緑の会」、自然体験や

世代間交流する「田んぼの学校」、会報やホームページで活動を伝える「情報発信の会」、青空市場を開く「さざなみマルシェ」の6部会が活動しています。年2回の神社の祭りでは小中学生が獅子舞を披露するため「とーちゃんの会」が笛や舞を指導し、世代間交流にもつながっています。今年3月には豊間中央集会所が完成し、「さざなみマルシェ」の青空市場を積極的に開催できるため、交流活動もより活発になりそうです。遠藤守俊区長は「住民同士の絆を強めるため、みんなが集まれるイベントや機会を増やしていきたい」と話していました。